

【Session 1-4】

タイ北部、ユーミエン（ヤオ）の船送り

吉野 晃

1 ユーミエン（ヤオ）

ユーミエン Iu Mien という民族は、中国では瑤（ヤオ）族、タイとラオスではヤオ（Yao）、ベトナムではザオ（Dao）と呼ばれている集団に含まれている。ミエン語を話し、Mien あるいは Iu Mien を民族自称とする人々である。タイには北部各県に計 45,571 人（2002 年）居住し、タイの「ヤオ」は全てユーミエンである。ユーミエンは、漢人との接触が長く、漢族文化の影響を強く受けている。ミエン語には漢語由来の語彙が多く、儒教的な親族イデオロギーはユーミエンの社会組織を強く規制している。宗教の側面においても同様である。漢族の側からの宗教の影響、特に道教の影響が強い。儀礼の経文は漢字で書かれ、手書き写本の経文を代々伝えてきた。

2 山地焼畑耕作民ユーミエンの伝承における「船」：〈飄遙過海〉神話

ユーミエンは山地民であるが、海を渡ったという神話を伝承する。ユーミエンの神話としては、「槃瓠神話」として知られる「犬祖神話」が別にあり、こちらの方が有名であるが、タイのユーミエンの許にあっては知られておらず、民族の由来を語る神話としては〈飄遙過海〉piu iu kia khoi 神話の方が人口に膾炙している。

〈飄遙過海〉神話のあらすじは以下の通りである。「〈十二姓傜人〉が南京にいたときに寅卯の二年が過ぎて三年続きの大干魃にあい、南京を脱出して船で海を渡った。渡海中に嵐に遭い、難破しそうになった所を盤皇という神に祈り願掛けした結果、盤皇の救護を得て助かり、広東道韶州府樂昌県にたどり着き、神に対して願ほどきの謝恩儀礼を行った」。

この謝恩儀礼はその後も〈十二姓傜人〉の子孫が行うべき義務とされている。その謝恩儀礼は〈歌堂〉dzou daang という。この儀礼は毎年行うものではなく、時に応じて数年～十数年くらいの間隔を置いて行う。この儀礼では、各姓カテゴリーの下位分節——これを〈分明〉pun-meng という——ごとに儀礼の際の供物の調理法や祭壇のしつらえが決まっている。儀礼に関する規定以外にも、〈分明〉ごとに決まっている男性の成人名の構成部分たる輩行名（世代を表す名）のセットもこの〈飄遙過海〉の時に決められたという伝承がある。即ち、〈十二姓傜人〉の枠組みを盤皇という神との儀礼的契約を結んだ集団として再規定し、且つ〈十二姓〉の下位区分の儀礼的規則と命名規則もこのときに起源を持つとされる。

ユーミエンは山地で焼畑耕作を行ってきた民族であり、タイでは標高 1000 m 以上のところで耕作を行ってきた。そのため、日常的な生活のなかで船を用いることはないし、彼らの物質文化の中に、船を造る独自の技術はない。日常的には、船にはなじみがないのである。しかし、彼らにとって重要な神話の中に、祖先が船で海を渡ったとする伝承があり、それが現在のユーミエンのアイデンティティに深く関わっている点は、非常に興味深いものがある。

3 ユーミエンの儀礼における「船送り」：〈掛燈〉〈做身〉〈超度〉儀礼の儀礼分節〈拆解〉における〈造船〉

表1は、タイ北部のユーミエンの許で行われている主な儀礼の表である。全てを網羅しているわけではないが、おおよその概要は把握できよう。ユーミエンの儀礼はその多くが祖先祭祀に関わっている。例えば婚礼においても、豚を屠るたびに、新郎或いは新婦の特定の祖先に奉じ祀った後に、婚礼の食卓にその豚肉が上がる。大がかりな儀礼を行うときには、まず祖先の霊を招じ、儀礼が無事執り行われるように加護を頼む。

ユーミエンには、〈掛燈〉(A-2)という、全ての男子を祭司として叙任する形の儀礼があり、この儀礼は成人儀礼としても機能している。この儀礼の時にも、祖先祭祀儀礼が組み込まれて行われる。また、死者は、〈做身〉(A-4)という葬儀の後、遺族が〈超度〉(A-3)という儀礼を3回行わないと、正式な祖先となれない。この〈超度〉儀礼の時にも、当該の死者以外の若い祖先に対して供養の儀礼が行われる。

船送りは、A列の〈大堂画〉を祀る儀礼のうち、〈掛燈〉〈超度〉〈做身〉の中で、祖先供養の儀礼分節として行われる。これは、〈大堂画〉の中にある十王図を用いるからである。その儀礼は〈拆解〉tsaeq jaiという。この儀礼は、厳密に言うと〈掛燈〉などとは別の儀礼であるが、そうした異なる儀礼を、一つの大きな儀礼の中で併行或いは付加する形で行うことは珍しくない。筆者は、〈掛燈〉〈做身〉〈超度〉の儀礼に伴う〈拆解〉儀礼を数度調査した。

4 〈拆解〉の儀礼の過程

〈拆解〉は、比較的若い世代の祖先(〈家先〉jaa-fin)に対して行われる。その祖先をあの世で苦しめている〈傷神〉(tsun mien または siang sin)という霊的存在を捕らえ、十王図の前に引き出し、裁判を行って〈傷神〉たちに悔い改めさせる。その後、〈傷神〉たちを船に乗せて外へ送り出す。この最後の段階で船送りが行われる。

4-1 準備段階

祖先の〈麻人〉：儀礼場の片隅に、低い壇がしつらえられている。そこには藁人形が数体おいてある。それぞれの藁人形には祖先(〈家先〉)の儀礼名(日本の戒名に相当する)が書かれた紙が貼ってある。即ち、各々の祖先個人を示している。藁人形のことを〈麻人〉maa nienという。この祖先の〈麻人〉に対しては、全体で酒盞5杯、水碗1杯、香炉一つ、箸を立てた飯碗一つ、鶏を調理した供物が供される。船送りの儀礼は、これらの祖先に関する儀礼である。

〈傷神〉の〈麻人〉：〈傷神〉を示す〈麻人〉も用意される。一つ一つの〈麻人〉には〈頭痛傷神〉という具合に個別の名称を書いた紙が貼られる。何人の〈傷神〉を儀礼で対象とするかは、当の〈家先〉に関する占いで決まる。おおよそ5~18の〈傷神〉が同定される。ある〈拆解〉では、次のような〈傷神〉が対象とされた。

〈頭痛傷神〉〈眼痛傷神〉〈耳痛傷神〉〈鼻痛傷神〉〈口痛傷神〉〈手痛傷神〉〈脛痛傷神〉〈胸痛傷神〉
〈肚痛傷神〉〈腰痛傷神〉〈背痛傷神〉〈四季流煉傷神〉〈川心六害傷神〉〈梅迷天吊傷神〉〈鎖鏗傷神〉
〈骨痛傷神〉〈喉沙腫痛傷神〉

〈船〉dzaang：これらと併行して、船送りのための〈船〉も藁を編んで作られる。

4-2 〈叫天〉heu lung

天の中空に住む〈玉帝〉Nyut taiを呼び出し、紙銭と上奏文を焼いて祈願を行う儀礼を一般に〈叫天〉heu lungあるいは〈當天〉toang thinといい、屋外に〈天香〉という香台を用意して、そこで行

表1 ユーミエンの儀礼

	A 18枚の神画のセット(大堂画) tom toang faangを掛け、高位の神 霊を招請する。	B(中空(半天高樓)に住む(玉 帝) Nyut taiへ向けた祈願を行う (〈當天) toang thinまたは(叫天) heu lung)。	C AとBのいずれもなし。
1 〈盤皇〉祭祀	〈歌堂〉		
	ユーミエンの祖先を救護した〈盤皇〉を祀る謝恩儀礼。姓の下位分節ごとに儀礼場のしつらえ、供物などが異なる。		
2 功德造成(修道)	〈掛燈〉〈度戒〉〈加職〉〈加 太〉		
	道教の道士叙任儀礼の形式をとっており、受礼者には、到達した儀礼的位階に応じた儀礼名(〈掛燈〉の場合は 〈法名〉faat bua)と、霊界の守護兵(〈陰兵〉yin-paeng)が与えられる。〈掛燈〉はミエン男子が通過すべき成人式で、 民族アイデンティティをも規定する。		
3 祖先祭祀	〈超度〉	〈當天安墳〉* 〈拆解〉[〈掛燈〉 〈超度〉〈倣身〉の儀礼分節として 行われることが多い] 〈安翁太 牌〉	〈尚翁太〉〈尚家先〉〈尚外祖鬼〉 〈尚外家鬼〉〈収兵〉*〈平安墳〉
	〈超度〉: 二日二晩ないし三日三晩。比較的若い世代の〈家先〉を供養し、冥界での安泰を祈願する。この儀礼を3 回行くと、死者は祖先=〈翁太〉ong-thaiとなることできる。 〈拆解〉: 祖先を害する瘟神を祓う。 〈安翁太牌〉: 祖先の祭壇を家に設置する儀礼。 〈尚翁太〉: 酒盞・水盃・線香・紙銭を供え、鶏一羽を供養する。1～2代目くらいまでの比較的若い世代の〈家先〉を 供養する儀礼。〈尚家先〉: 四～五代以上上輩の祖先を祀る。〈尚衆鬼〉: 全ての家先を祀る。〈尚外祖鬼〉: 家 主の母方の祖先を祀る。〈尚外家鬼〉: 家主の妻の祖先を祀る。 〈収兵〉*: 祖先をあの世界で苦しめている悪鬼を駆除する。 〈平安墳〉: 祖先の墓のレプリカを清掃して墓を清める。発童を伴わない。 〈當天安墳〉*: 発童を伴う安墳。		
4 人生儀礼	〈倣身〉[葬儀]		〈添人口〉〈斥人口〉〈出花林〉 〈倣親家〉[婚礼]
	〈添人口〉: 出生、養取、婚入など、ピャオの新しいメンバーを〈家先〉に紹介し、その内の一人の〈家先〉に新しいメン バーを登録し、守護祖先とする。		
5 収魂[生者の魂 を呼び戻す]		〈當天架橋〉	〈架平橋〉[多種] 〈叫魂〉〈贖 魂〉〈贖花〉〈搶魂〉*
	収魂儀礼: 離脱した〈魂〉を本人の身体に呼び戻す儀礼。人間の身体各部分に離脱可能な〈魂〉uanがある。総 数10又は12(インフォマントにより異なる)。〈魂〉が身体を離れる→身体の当該部位の不調→この遊離した〈魂〉を身 体へ戻す。		
6 穀霊祭祀		〈入春〉	〈招稻魂〉〈贖稻魂〉
	穀物の霊を呼び戻し、豊作を祈願する。		
7 土地霊祭祀			〈設地方鬼〉〈設地鬼〉〈給秋〉 〈開山〉
	土地の霊を祀り、安全を祈願する。あるいは耕地の霊を祀り、豊作を祈願する。		
8 厄祓い			〈解煞〉
	個人の身の上に掛かっている悪い作用(煞)を解除する。		
9 願掛け・返礼			〈許願〉[多種] 〈還願〉[多種] 〈賀年〉*
	家内安全や豊作を願掛けする。		
10 謝罪			〈釋師父〉〈釋天地〉〈釋契父〉
	何らかの霊に対して侵犯したために起こった不幸を、謝罪によって解除する。		
11 その他			〈設太陽月亮〉〈設元肖鬼〉〈奏 星〉〈設百家姓〉
	心身の不調を解消する儀礼。あるいは不調が生じぬよう予防措置をとる儀礼。		

*=シャマンが関与する儀礼。

補注 「4 人生儀礼」の説明中にある「ピャオ」とは、一つの家に同居する家族のことを指す。

う。〈拆解〉では、〈拆解疏〉〈拆解黄表〉〈拆解表引〉〈拆解洪恩大赦〉〈拆解休詞〉〈拆解答案詞〉といった上奏文を頭上に掲げた箕の上で焼き、〈玉帝〉に届ける。同時に地面のうえで〈和詞〉という文書も焼く。

4-3 〈補煉堂〉 pou ling-toang

裁判所たる〈煉堂〉ling-toangを準備する。竹で編んだ席〈席〉tsiqを祭司が持ち、罡歩する。〈走罡歩〉yaang kong pouその後、席を広げ、四隅と中央で紙符を焼き、席を〈煉堂〉にする。

4-4 〈断箴〉 dun tsien

〈箴〉tsienは芦の類を束ね、紙で巻いたものである。この束は、予め二つに切っており、それを紙で巻いて恰も一本のようにしている。〈煉堂〉の上に長椅子を横にして置き、この〈箴〉をたたきつけ、二つに割る。これは、〈家先〉と〈傷神〉を分離する意味であるという。これにより、〈家先〉を害していた〈傷神〉をまず〈家先〉から切り離し、裁判にかけるのである。

4-5 〈拿傷〉 tsoaq tsun

〈煉堂〉の横倒しにしたベンチに儀礼用の〈棍〉を立て、壁に掛けてある〈大堂画〉の中から、〈十殿王〉tsiep tin hungの画幅を外して棍に掛ける。祭司は〈十殿王〉の画幅の裏に座る。背中に符をつけた警官役の〈將軍〉と〈沙傷〉が、予め屋外に用意された〈傷神〉の藁人形を捕らえに行き、〈十殿王〉の前まで連行する。

4-6 〈審傷神〉 siem tsun-mien

〈傷神〉の裁判を行う。〈十殿王〉図の裏に座った祭司が〈十殿王〉に成り代わって審判する。〈傷神〉の一人一人に悔い改めるかと問いただす。〈傷神〉が悔悛したかどうかは、〈筭〉jaauという占い具（台湾のポエと同類）で判断する。悔い改めなければ〈將軍〉が刀で〈傷神〉を痛めつける。

〈拿傷〉と〈審傷神〉のくだりは、儀礼参加者や見物人が多数見ており、寸劇の様相を呈する。寧ろ、厳粛に行われる他の儀礼部分に対比して、うち解けた雰囲気であり、〈傷神〉を刀で罰するときなどは観客は大いに囃したて、笑いが起こる。

4-7 〈造船〉 tsou dzaang と〈戒傷〉 jai tsun

悔い改めた〈傷神〉たちと分断された〈箴〉を船に乗せる。このときに〈造船歌〉を唱える。〈造船歌〉はこの船が造られた由来を神話的伝承として語るものである。さらには、〈戒傷歌〉を唱え、歌詞に合わせて七回角笛を吹く。これにより、〈傷神〉は完全に排除される。〈船〉は〈大門〉から引きずり出され、ある程度離れたところで焚焼される。〈船〉を外に引きずり出すときに下に水を流しながら引くときもあるし、もしも家の近くに川や水路があれば、そこに流す場合もある。

資料として、〈造船送瘟病〉などの〈造船〉と〈戒傷〉で使う経文のテキストを挙げておいた（資料1）。

4-8 〈祭煉堂〉 tsai ling-toang

箕の上に12個の盞を載せ、それを〈煉堂〉の上に置く。鶏の首をかき斬り、その血を〈煉堂〉と盞に振りまく。これは〈十殿王〉の労をねぎらって供するものであるという。

4-9 〈送玉帝〉 fung nyut-tai

最終的に〈玉帝〉を天へ送り返す。

5 考察

5-1 ユーミエンの〈造船〉の特徴

ユーミエンの〈造船〉は、瘟神悪鬼を捕らえて船に乗せ、外部へ送り出す儀礼であり、その点で、東

アジアの他の地方における「王爺」などの船送りの儀礼と相同である。ユーミエンの居住地は山の中であるが、河を通じて海へこの船が流れて行き、帰ってこないと想定される。山の中だけに、海は遙か遠い観念的な場所であり、逆に瘟神を送り祓う先としては適している。

湖南省藍山県のユーミエンの許に龍船儀礼がある。一つは、〈度戒〉儀礼の後に、儀礼で用いた用具などを〈龍船〉に載せて焼く儀礼である。もう一つは、年中行事として行われている儀礼で、村落の中の各家を〈龍船〉が巡り、悪しき霊を集めて、川辺で焼く儀礼である。毎年行うのが原則であるが、最近では、出稼ぎ者が増え、担い手が減って、必ずしも毎年行っているわけではないという。他の地方での龍船儀礼を見ても、村落単位である事例が多い。村の中の瘟神を龍船に集め、それを送り出す、或いは焚焼する。

これらの事例との比較で興味深いのが、タイ北部のユーミエンの〈造船〉が、あくまでも祖先祭祀の一環として行われている点である。これが、ユーミエンにおける龍船送りの儀礼の特徴であろう。他の事例の多くが生者の生活空間から、生者を害する瘟神を空間的に排除するための儀礼であるのに対し、ユーミエンの龍船送りは、既に死んだ祖先から瘟神を駆除するための儀礼である。また、主催者は、祖先を共にする父系親族に限定される。村落の儀礼ではなく、個別の親族組織の儀礼として行われるのである。瘟神も、主催者たちの共通の祖先を害している瘟神に限られる。これは系譜上の祖先を浄化するための儀礼であって、村落には関わらない。

因みに、タイ北部のユーミエンの許では、生者を害する悪鬼や瘟神を排除し浄化する儀礼には船は一切出てこない。瘟神を船に乗せて送り出すという船送り儀礼のデザインは、漢族から受容したものであろう。しかし、ユーミエンはそれを換骨奪胎して、祖先祭祀の儀礼として再編成したのであった。祖先は船に乗って南京から移動した。また、祖先を害していた瘟神も船で送り出される。ユーミエンにとって、船は祖先の伝承と祖先の儀礼に関わる存在なのである。

5-2 身体表現の特徴

〈拆解〉儀礼における身体表現は、ユーミエンの儀礼体系の中でも次の点で特徴的である。一つは、ユーミエンの他の儀礼よりも演劇性が顕著であることである。ユーミエンの儀礼の多くは、祭司の読経、祭司補助者による振鈴・拝礼、上奏文の焚焼、紙銭の焚焼といった神霊への間接的な送信が大部分である。一方、〈拆解〉における祭司や儀礼補助者の動きは、〈傷神〉の〈麻人〉を捕らえ、それを罰するという具象的な動きにより、一種の演劇となっている。こうした具象的な演劇性を伴う儀礼は、他にも若干見いだせる。B-3〈當天安墳〉とC-3〈平安墳〉という祖先の墓を修復する儀礼では、土盛りした墓のレプリカを屋内に作り、そこを清掃・整地する所作を行う。また、A-2の〈度戒〉やA-1の〈歌堂〉では、祭司、祭司補助者、儀礼参加者が精霊役の儀礼参加者と演劇的問答を行う場面がある。このように具象性とストーリーを伴った儀礼表現は、ユーミエンの他の儀礼にも見られる。しかし、明確なストーリー（〈傷神〉退治）と、〈麻人〉、〈船〉、刀等々の具象的な対象、ストーリーに沿ってこれらの対象を操作する祭司と祭司補助者の動きは、ユーミエンの他の儀礼には余り見られない演劇性を付与している。それ故、儀礼の他の分節とは異なり、大人も子供も観客として儀礼に参加している。

もう一つ、特徴的なのは、祭司の〈罡歩〉である。〈罡歩〉も他のA-1〈歌堂〉やA-2の諸儀礼、A-3の〈倣身〉の他の儀礼分節などでも用いられる。〈罡歩〉は空間を特別な聖なる場に転換するために行われるが、この〈拆解〉儀礼に於ける〈罡歩〉はそれがより顕著に現れ、観客にこれから〈傷神〉裁判が行われることを示す、前口上の役割を持っている。即ち、上記の演劇性をより強調するパフォーマンスとなっている点で、他の儀礼における〈罡歩〉とは異なっている。

〈拆解〉は、明快なストーリー性を持った演劇的パフォーマンスによって、祖先を害している〈傷

神〉を退治し祖先を安泰ならしめることを印象的に表現している。その中で、日常生活でなじみのない〈船〉は、送り出される〈傷神〉の乗り物として、瘟神の排除を演劇的に印象づける役割を持っているのである。

註

ミエン語の音声表記について——本発表におけるミエン語（ユーミエンの用いる言語）の表記は、印刷の煩瑣を避けるため IPA をそのまま用いずに、筆者が手を加えたものを用いる。子音・母音ともにローマ字読みするが、幾つかの付則をもうける。本稿に用いた記号についてのみ記す。子音：j=/j/, ng=/ŋ/, 母音：a=/a/, aa=/aː/, ea=/ɛ/, oa=/ɔ/, ou=/əu/, oi=/ɔi/, ia=/iʌ/ とする。ミエン語には a/aa 以外は母音の長短の弁別はない。声門閉鎖は q で示す。ミエン語では声調も音素であり 6 種の声調があるが、声調は煩瑣になるため表記を省略した。ユーミエンが用いている漢字表記は〈 〉で括って示す。

〈拆解〉の漢字表記について——〈拆解〉は〈析解〉とも書く。ユーミエンの文書は手書きである故に、木偏が手偏と区別がつかないことがしばしばあり、又、斥の点が省かれて斤と記されることもあるゆえに、どちらの表記も見られるからである。但し、tsaeq という音素と意味（切り離す、解体する）から、〈折〉ではないと判断される。発表時のレジュメではワープロソフトで入力が難しかったので、暫定的に〈析解〉と表記したが、今回改めた。

参考文献

- 古家信平・松本浩一 1991 「王爺祭の儀礼空間」、植松明石（編）『環中国海の民俗と文化 二 神々の祭祀』、東京：凱風社、pp.63-83.
- Lemoine, J. 1982 *Yao ceremonial paintings*. Bangkok : White Lotus.
- 三尾裕子 1990 「〈鬼〉から〈神〉へ—台湾漢人の王爺信仰について—」『民族学研究』55（3）、pp.243-265.
- 吉野 晃 2001 「Ⅱ 第 1 章 ヤオ族と道教」野口鐵郎・遊佐昇・野崎充彦・増尾伸一郎（編）『講座道教 第 6 卷 アジア諸地域と道教』東京：雄山閣、pp.68-83.
- 劉 枝萬 1984 『中国道教の祭りと信仰』下、東京：桜楓社

《資料1》

又到造船送瘟病

擇請造船郎父

造船師父來護我

唱歌便向歌詞意

船頭莫從根底樑

未曾造船先造水

走去東方起個井

走去南方起個井

走去西方起個井

走去北方起個井

走去中央起個井

小水流來合大水

大河茫茫去不得

姊妹謫量去尋木

一枝生上桃源洞

上有一枝無路去

樹上鳥鴉無數个

到處神壇去許愿

令得黃龍帰大海

買双生鷄説土地

姊妹相邀齊下斧

木倒地 木倒地

任根在頭葉帰尾

船頭量得三尺六

又請魯班多計較

木頭斷木頭倒斷

三百人夫撓不動

三百人夫多計較

不覺黃天落太木

衆村老人齊來看

走去桃源請水兵

請得水兵帰家了

匠人説銀無万貫

只有主人不得看

只有魯班多計較

解開大板無万塊

大板將來合船底

又買大丁無沙数

又買大丁三百口

又買同油過船底

又買大丁丁船底

將得一年得一角

漬得三年得三角

船成了 船成了

識得船逢濠細雨

又擇造船郎二官

祖師護我造毛船

我今唱出古時言

莫從根尾樑帰頭

造起水來正造船

東方青水起茫茫

南方赤水去茫茫

西方白水去茫茫

北方黑水去茫茫

中央黃水去茫茫

大水流來成大河

姊妹謫量去斬船

只有一条清水枝

二枝生上樑潘々

細樑陀梳生上天

樹下黃龍把過根

到處廟堂掛紙錢

促得鳥鴉飛上天

齊々唱曲上西天

木葉紛紛落兩邊

木頭倒地把雷鳴

任根在尾葉帰根

小歌量得四尺長

使將法木洗邪神

木頭斷了鎮雷鳴

四百人夫施不移

兩手又腰面向天

木頭流出廣門前

節木分明好斬船

三日三夜烏啼川

家中吃酒説無錢

主人還錢無万十

匠人座下就無十

便將錢子兩頭掃

界開小板無千年

小板將來合船強

又買小丁丁船邊

又買石灰批兩邊

又買小丁無万十

又買小丁丁船強

漬得二年得兩邊

漬得四角正成圓

十二人夫撓不迂

便得船底這兩邊

船成了 船成了

庄得双船真好看

頭高正好趕天下

鑼鼓喧々向門外

送去今年瘟災鬼

今年世界無多好

今年世界無多好

今年世界無多好

人魚動作分非走

螃蟹得見開邪笑

烏龜得見走上岸

河泊水官呵々笑

一送船頭向門外

又請蛋家來世船

庄得頭高尾又高

尾高正好木天門

嘯動龍船送鬼神

送去今年瘟狀神

送去今年太歲神

送去今年行煞瘟

送去今年邪鬼神

撞人動作倒閨門

蝦公得見腰都休

蜆蚌得見脚都酸

從小未會見大船

二送船尾下廣州

又到相鄧船頭公船尾婆開光点度

船頭公船尾婆 無人鄧你開光点度

五師鄧你開光点度 点度光明

報明隨頭点下脚 脚光行十方

又到船頭向方位

船頭向帰東

東方買賣得一个大鷄公

船頭向南方

南方買賣也無難

船頭向西方

西方買賣也得來

船頭向北方

北方買賣也是得

有錢買得 無錢也買得

千般萬班得

凶休 凶休 大船撐出大州

又到角喙元送船行

一喙鳴角去遊遊 元送瘟災之氣瘟病神陸巨怪無精

黑怪妖兩四海頭元送龍船一直花排一面四海岸 千

年萬代不回頭

二喙鳴角去運々 元送瘟災之氣瘟病神皇巨怪腰精

黑怪妖兩四海頭元送龍船一直花排一面四海岸 千

年万代不共運

三喙鳴角去客客 元送瘟災之氣瘟病將軍巨怪妖精

黑怪腰兩四海頭元送龍船一直花排一面四海岸 千

年萬代不回宮

四喙鳴角去形形 元送瘟災之氣瘟病將軍巨怪妖精

黑怪腰兩四海頭元送龍船一直花排一面四海岸 千

年萬代不回迂

五喙鳴角去元元 千年萬代不回門

六喙鳴角去潘潘 千年萬代不回壇

七喙鳴角去洋洋 千年萬代不回陽

(二〇一一年九月、タイ王国ナーン県ムアン郡

ボー区N村鄧貴坤氏所藏文書より採録)